

アドソンの無鈎鑷子むこうせんじが二十二本来たりて「無」の字を二十二個書く 高橋秀

作者は、大きな病院で裏方の仕事をしており、毎月、仕事の現場をていねいに取材した作を作っている。今月の作もその一連。辞書によれば「アドソン」はピンセットのこと。「無鈎鑷子」は、手術用の小型のピンセットの一種らしい。無鈎鑷子と有鈎鑷子があるので、前者には一本ずつに「無」と書くのだろう。手書きした二十二個の「無」の字をアドソンに貼るのかもしれない。いずれにしても治療が終わればピンセットは洗浄され「無」の字は消える。徒勞と思えるようなそんなことが、医療の現場をささえているのだ。

幸せになつたなつたと言ひしのちやかんのやうに泣きやくるひと 萩野聡

ひさびさに会つた人なのか。それとも恋人のようによく会っている人なのか。どちらとも読めるが、ここでは前者と読んでおこう。「やかんのやうに」が独特である。沸騰したやかんのように、周辺の空気にはおかまいなしに、ひたすら泣きじやくっているのだろう。幸せの、それが表現なのだろうか。「ひと」は女性だと思ふが男性でもかまわない。

桜咲く母の遺詠をそばに置き棘有るごとく父は飲み込む 中川弘子

何を飲み込んだのかこの一首だけでは不明だが。一連を読めばビールだと分かるようになっていいる。ビールをちよつとつらそうに飲む感じがよく出ている。今は老い

## 短歌の現在

No.433

## 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

た父。かつてはいろいろあつた父らしい。そういう家族の物語を想像させる作りになっている。

青空に昔のわれが棲んでいて時間は前にゆくのみならず 中西由起子

「現在の青空」に棲んでいるのは、「現在のわれ」ではないという感覚。時間は不可逆的に前に進むのではないかもしれないという感慨。「いにしへのしづのをだまきくり返し昔を今になすよしもがな」という伊勢物語の有名な一首を思い出した。

口元に笑みは宿りているらんか冬雑踏にマスク行き交う 天野美奈子

笑顔の人が一人もない人混みの奇つ怪さを上句によりみとつていいだろう。まったく「笑み」がないマスクの人だらけの風景の異常さ。私のようなマスク嫌いの人間にはよく分かる。

衆院の傍聴席の赤絨毯色褪せ擦り切れ段差急なり 外山和美

国会議事堂に傍聴に出かけて行つた際の歌である。一連全部、ドキュメントタッチでうたつて、現場感を突出させている。この一首も、下旬、現場の描写に徹している点に注目する。

翔びながら啼き交はすこゑ早春の蒼きみ空のアトリひと群れ 児島昌恵

鶉ほかの野鳥をうたつた一連のなかの作。この一首、よく鳴きながら飛んでいるアトリの特徴をよくとらえている。